

園番号 718

## 令和3年度 奈良市立学園南こども園 研究実践概要

園長名 梅田 真由美

全園児数 219名

### 1. 研究主題

「生き生きと生活し、意欲を持ってやりとげる子どもをめざして」  
—子どもの発達に応じた遊びこめる環境構成や援助のあり方を探る—

2. 研究年度 3 年度

### 3. 研究主題設定理由

昨年度の研究で、豊かな環境構成や援助のあり方について知ることができた。しかし、日々の保育実践の中で、遊び始めてもすぐ別の遊びにうつったり、遊びの継続が難しかったりするという課題が見られた。そのため、子どもの興味や関心を見取り、遊びこめる環境構成と援助の仕方についてさらに深めていきたいという思いで主題を設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

・子ども達自ら意欲を持ち、夢中になって遊びこむことができる発達に即した環境構成や援助の方法を探っていく。

#### ②研究の重点

- ・乳幼児の豊かな心と体を育むために、職員同士の共通理解を図りながら、発達に応じた保育内容の充実や遊びを見取り、それに応じた環境や援助の仕方を探る。
- ・昨年度の実態を踏まえ、0歳児から5歳児までの発達過程を理解し、乳児から幼児につながる保育を探っていく。
- ・保育者の関わり方を工夫しながら、意欲的に取り組める環境構成や援助の仕方を探る。

#### ③活動の方法

##### 【0歳児】 通年

視線が合いにくく表情も乏しいA児。周囲の物に興味をもち自分から手を伸ばそうとする姿が見られず、午睡時は寝入ってもすぐに泣いて起きることが続いていた。特定の保育者が丁寧に関わり、食事・排泄など生活面の世話をすると共に、本児が好きな遊びを一緒にしながら楽しさを共有するようにした。しばらくすると少しずつ視線が合うようになり、保育者の語り掛けに笑顔で応える姿が見られるようになってきた。また、個別の関わりの元であれば、玩具を手取るようにもなった。その後も特定の保育者との関わりを継続したことにより、今では生活リズムが一定になり、表情豊かに過ごすようになった。また、自分から玩具に手を伸ばし、したい遊びを楽しみ探索遊びやしたい遊びを楽しむ姿がみられ、感じたことを仕草や指差しまた声に出して周囲の保育者に知らせようとするようにもなった。



##### 〈考察〉

食事・排泄・睡眠に特定の保育者が継続して接することや、応答的な関わりを大切にすることで、情緒が安定していく姿が見られた。また、A児の興味や関心、発達段階を捉え、それに応じた遊びの環境を整えるよう努めた。これらのことによって、生活が安定し、遊びでも意欲的に周囲の物や人に関わろうとするA児の姿につながったと考える。

##### 【1歳児】 「おいしいごちそうできたよ」 12月

A児は園庭に出ると、先日保育者が葉っぱやつぼみ、ドングリなどを集めてきて遊びの用

意をしていたことを思い出して、同じように園庭の隅で葉っぱを集め始めた。バケツを手に熱心に集めると、「先生、お買い物行ってきた」と知らせた。砂場の近くのテーブルに座り、皿に入れた砂のご飯の上に葉っぱをのせたりかき混ぜたりしていつものようにご飯づくりを楽しんでいる。「お野菜が入っていておいしそうだね」と言うと、満足そうに微笑んでいる。それを見ていたB児も保育者がテーブルに用意した花がらや小枝などをA児と同じように砂のご飯の上にさしたり並べたりし始めた。「こっちにもおいしそうなのができたね」と言うと、「うー、うー」とできたご飯を指さして嬉しい気持ちを伝えている。また、C児はテーブルの上のドングリを見つけて無心で皮むきをしている。なかなか上手くむけないが、繰り返しむいている。

<考察>

遊びの材料となるよう葉っぱや花がら、イモなどを子どもの身近においておくことで、自然物に興味を持って触ってみたり、飾りつけを試してみたり、ご飯づくりをしたりと、それぞれの楽しみ方をすることができた。また、保育者のすることをまねて自分で集めてみたり、友達をまねてごちそうをつくったりして、周りの人のすることに興味関心を持つ姿も見られた。一人一人の子どもの思いに耳を傾けさりげなく見守ったり、嬉しい気持ちに共感したりすることで、自分のしたい遊びに夢中になり満足感を感じることができた。

【2歳児】 「今日もドングリしよう」 9月～12月

ドングリに興味を持ってきている子ども達。次の日に拾ったドングリを園庭に置いておくと、あまり興味を示さなかった子どももドングリを触ったりままとごに使用したり、近くにあったトイやホースから転がしたりして遊び始めた。その様子を見て、いろいろなものを転がして遊べるように園庭に板やカプセル、缶などを用意した。板からドングリやカプセルを転がすことで、トイとは違う転がり方をし、板から落ちないように転がしたり、缶をめがけて転がしたりすることを楽しむようになった。「わあ、入った」「たまご(カプセル)割れちゃった」と楽しんでいた。そこで十分な数のドングリを用意すると、子どもたちが遊びたい時にすぐに遊べるように、トイを組み合わせてくりつけておいた。園庭に出ると「なにしよう」「ドングリしよう」と、自分でドングリを取って、転がして遊ぼうとする姿が見られるようになった。子ども達だけで遊びを展開していくことは難しいが、保育者と何度も遊んでいくうちに、転がすものによって転がる速さが違うことを楽しんだり、カプセルの中にまっぼっくりや砂、ドングリなど好きなものを入れて転がしたり、遊び方を少しずつ変えながら楽しむようになった。

<考察>

遊びの環境をその都度子ども達の様子に合わせて変えることで、子ども達の興味関心を探っていくことができた。また、素材の一つとしてカプセルを用意したことで、転がすだけでなく、中に好きなものを入れたり、缶に当てたりなど、さまざまな遊び方を楽しむことができた。子どもたちがやりたいと思った時に、子どもの「やってみたい」「遊びたい」という気持ちを実現できるように、十分な数を用意することが大事であると改めて実感した。

【3歳児】 「なんか楽しくなってきた」 9月～1月

すぐふらついたりこけたりすることが多く、活動の中で「できない」と思い込んでいることで参加しない子どもの姿が見られた。そこで足で踏ん張る経験を増やして、意欲的に参加してほしいと1枚の大きめのタオルの端をそれぞれ結んだものを使って、タオル綱引きに取り組み始めた。すると、活動に参加しようとしなかった子どもが出てきた。保育者が「一緒にしようよ」と声をかけても首を横に振る。保育者は一緒に参加してほしいと思い、クラス全体で考えていくように活動の最後には必ず話し合いをすることにした。保育者は子どもたちの勝った喜びにも共感する。負けて泣いていたA児は「負けて悔しかった」と言った。保育者は「一生懸命頑張ったから負けて悔しかったんだね。」と言うと、A児はうなずいた。保育者が「次はどうする?」と聞くとA児は「次は勝つように頑張る」と言った。次回になると、思い切りタオルを引っ張り、足を踏ん張るA児の姿が見られた。勝つことができ、「やった!」と跳び上がって喜び「勝てて嬉しかった!」と話す。保育者は「勝ててうれしかったね。負けた時は、次勝てるようにいっぱい引っ張りよう!と言う気持ちを持って頑張ったからだよ。」と言ってA児を認めた。後日、今まで負けるのが嫌で参加しようとしなかったB児が



参加することができた。B 児は保育室で取り組んだ後の話し合いで、「なんか楽しくなってきた」と笑顔で話した。周りの子どもからも「負けても次頑張ったらいいねん！」という声も聞かれた。保育者はうなずき「そうだよね」と笑顔でこたえた。

〈考察〉

初めは手の力の入れ方が分からず、すぐに引っ張られてしまっていた子も、回を重ねるごとに力の入れ方が分かり、楽しさや、勝つ喜びを感じることができるようになった。また逆に、初めは勝っていた子が周りの子が力をつけることで負け、くやしさを感じることができた。経験として互いにどちらの気持ちも味わうことができて良かったと思う。

泣いている時、泣かないように伝えるのではなく、泣きたい気持ちを十分に受け止め、じっくりと話を聞くことで、子どもが自分の気持ちに気づき、適切に助言をしながら思いを引き出すことができた。そうすることで、子ども自身も次への意欲がわきやすくなったと思う。

【4歳児】 「ケーキはいかがですか？」 9月～11月

空き箱製作でいつも同じものをつくっているため、イメージを膨らませてつくることを楽しんで欲しいと思い様々な素材を準備し置いてみる。しかし、新しい素材をテープで貼り付けることだけを楽しんでいたため、保育者が切ったり丸めたりした素材を使い、ケーキをつくりはじめる。それを見て「それケーキみたい。わたしもつくりたいなあ。」と言って何人かの子ども達が、箱にイチゴやチョコレートに見立てた飾りをつけケーキをつくりはじめる。「ケーキ屋さんみたいやな」「いらっしやいませ～。ケーキはいかがですか？」と言ってお店屋さんごっこが始まった。遊びの振り返りの時にケーキ屋さんに欲しいものは何か話し合いをした。子ども達から看板、お皿、ケーキを持ち帰る箱、お店屋さんのエプロン、お金、レジと意見が出てきた。つくるために必要な素材が見つかること保育者に伝え、その都度様々な素材を用意し、イメージ通りにつくるにはどうしたらいいのか友達や保育者と相談しながら「ぼくお金つくるわ!」「ケーキの名前書いた紙置いたらわかりやすいんちゃう?」と準備を進め、ケーキ屋さんがオープンした。ケーキを食べる机も用意し、「このケーキ下さい。」「チョコケーキは100円です。」「あちらに座って食べてください。」とやりとりをしながらケーキ屋さんごっこを楽しんでいた。

〈考察〉

素材に親しみながら工夫してつくって欲しいと思い、保育者が様々な素材を用意し、切ったり丸めたりと素材に手を加え、実際につくって見せた。そのことで、自分なりにイメージしたものをつくるにはどうすればいいかを考え、工夫してつくる姿につながった。また、自分が経験したことや知っていることを遊びに生かし、友達とやりとりを楽しみながら遊びを継続していくことで、遊びをさらに深めていくことができた。

【5歳児】 「体を動かそう」 4月～12月

からだ全体の動きのぎこちなさがあり、運動遊びに消極的な子、じっくり遊びに取り組みえない子、遊びが見つけれずにいる子などが多く、体を使って遊ぶ心地良さをもっと感じてほしいと願い、共通経験でいろいろな遊びを取り入れてきた。

《1学期》

クラス全体で体を動かす活動を定期的に設ける。園庭に出る際、遊び始める前に全員で片足跳びやギャロップ、スキップなどの簡単な運動遊びを繰り返し毎日行うなかで、「カエル跳びやろう。」「ペンギン歩きしてみよう」と子どもからの発案が日々増え、意欲的に参加し、体を動かす楽しさを感じることができた。また、リズム室でピアノに合わせた「うごき（体を大きく動かすリズムあそび）」を繰り返し取り組むなかで、体幹やバランス（しゃがんでつま先で歩く、両手を広げて立つなど）等、体の部位の使い方がわかり、以前よりも自信をもって参加する姿がみられるようになる。

《2学期》

室内で縄跳びやフープなどを使った遊びやゲームなどを楽しむ機会を設ける。運動用具を用いる中で、なわとびを並べて跳ぶ遊びやフープを使ったゲーム等、誰もが無理なくできるものを取り入れて楽しんだ。フープでは、「こんな風に回せるよ」と子どもが足や首で回す等、友達の遊んでいる姿に刺激を受け、いろいろな遊び方を考えたり試したりしている。自由選択の活動の中で、園庭では巧技台や平均台、S棒、三輪車やパカポコなど、色々な用具を組み合わせたサーキットを楽しんでいる。「誰か反対側持ってー」「せー

の！」と声をかけ合いながら準備をしたり、巧技台の間隔を広げたり高くしたりして何度も試しながらコースを作り、遊ぶ姿が見られる。また、三輪車やパカポコの所で列が滞ると「三輪車運ぶ係するわ」「パカポコ戻す人も要るなあ。」など周りを見て判断し、役割分担しながら遊びをすすめていく姿がみられる。



〈考察〉

『からだを動かす機会をクラス活動として設けていくこと』『“できる”“できない”ではなく、充実感を得られる活動を意識し積み重ねていくこと』で、運動あそびに苦手意識がある子も無理なく参加し、自信や達成感を感じることができた。そして活動を継続したことが、自分に自信をもてる活動を発見することにつながった。また、互いの違いやよさに気づき、認め合うことで友達と共通した目的のなかで、協力したり役割分担をしたりして意欲的に活動をすすめていく姿が変わっていった。

【長時間保育】 「あわできた～！」 8月

夏休み中、夏の遊びや水に親しみ楽しんで欲しいと長時間担任同士で話し合い、園庭に泡、色水、ヨーヨーすくい、的当てなどの水を使って遊べるコーナーをつくる。3・4・5歳児が園庭で遊んでいた。泡のコーナーでは遊んでいた4歳児がなかなか泡が立たず苦労していた。するとそれを見た5歳児の子どもが「やったるか？」と手伝い始めた。「石鹸こうするねんで？」とおろし金で石鹸を削って見せた。また、色水では、つくりたい色が上手くできないでいる子に「この色とこの色混ぜたら、〇〇色になるねんで」と教え合ったりする姿が見られた。異年齢児から教えてもらったことを友達に知らせたり、自分より小さい子に教えたりするなどのつながりを感じた。また遊びが継続できるようにつくったものを保管する場所や遊びに使いたいもの、準備するものなど、子どもからの声を拾い上げていくことで繰り返し遊ぶ姿へつながった。

〈考察〉長時間保育の中で、子ども達が自然に交流できる時間をつくったり、夏の遊びを十分に組みこめる環境を工夫していくことで、子ども達は、交流を深めたり、互いに刺激を受け、大きい子が自然に小さい子に対して思いやりの気持ちをもったり、小さい子は憧れを抱き、自分も「やってみたい」「やってみよう」「あんな風にしたい」等の気持ちの芽生えにつながった。またつくったものを次の日も使えることで遊びを継続する姿が多く見られた。

## 5. 研究の成果

乳児保育においては、保育者との信頼関係のもとで遊びや生活を積み重ねていくことで、安定した環境の中で愛着関係、信頼関係を深めていくことができ、そうした関係が子ども達の安心した気持ちへとつながっていった。乳児では、安心できる保育者との関係の中から、子ども達が自ら周りの環境に働きかける意欲の土台をつくることや発達・興味関心、身に付けたい力などを考え、環境を準備していくことが大切であると分かった。幼児では、保育室の環境を見直したり、遊具を整えたりするなど、担任同士で話し合う中で、子ども達が自ら試したり、友達と遊びを意欲的に進める姿がみられることが多くなってきた。子どもの姿や振り返りの中から様々な物を準備することで、イメージを広げ、明日もやってみたいと思える子どもの姿が見られた。子どもの興味や関心を受け止め遊びへとつなげていけるような環境作りや子どもの声やイメージや思いを拾い上げ、実現できる保育者の援助が大切であると考える。

## 6. 今後の課題

今年度の研究を通して、環境を整えていくことで、子どもの遊ぶ姿に変化が見られ、一定の成果が見られた。これからも子どもの姿を見取り、共に環境に関わり、遊びを共有しながら益々子ども達が意欲を持って、あそび込める環境とはどのようなものかを考察し、探求していくことが必要であると思われる。また保育者同士の語り合いの中から、意見を交わし、共に考え取り組んでいくことが必要であると思う。

一人一人の子どもの思いに寄り添いながら、発達に応じた指導計画や環境、援助などをさらに見直し、これからの保育に繋げていきたい。